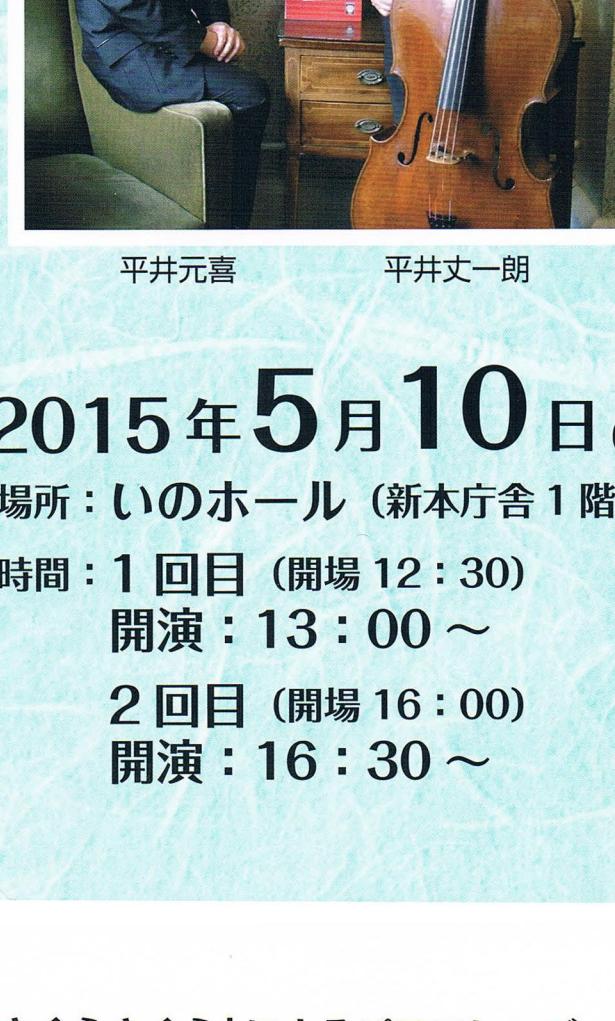


いの町新本庁舎完成記念式典・町村合併10周年記念コンサート

～伝統ブルーと至高の調べ～

平井丈一朗 チェロ・記念コンサート

ピアノ：平井元喜



平井元喜

平井丈一朗

2015年5月10日(日)

場所：いのホール（新本庁舎1階）

時間：1回目（開場12:30）

開演：13:00～

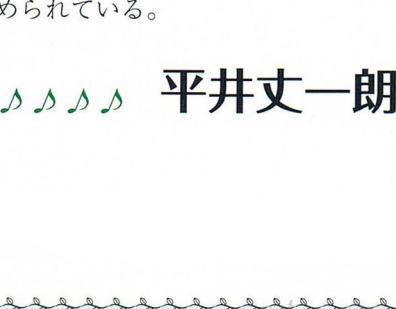
2回目（開場16:00）

開演：16:30～

●平井康三郎：「さくらさくら」によるパラフレーズ

この曲は、父・康三郎が壮年期にさしかかった1953年の作曲。当時私は、作曲する父の横に付いて1ページでき上るとチェロで奏いてみて、またその先を父が書く、といった具合に作曲が進められたのを思い出す。カデンツァの部分など、父もチェロの技巧的な面ではかなり私の意見を取り入れて曲を完成したのであった。初演は'50～'60年代にかけてニューヨーク、パリ、ロンドン、ベルリン、ウィーン、モスクワなど世界200都市以上で私が行い、高い評価を得た作品。「パラフレーズ」には「敷衍（ふえん）曲」という訳もあるが、この曲の場合、自由な形式で書かれた変奏曲風の作品ということになる。

卒寿の父、平井康三郎を囲んで
(左から、丈一朗、秀明、美那子、元喜)



●平井康三郎：ゆりかご

平井康三郎 作詞・作曲の歌曲「ゆりかご」は、日本全国のみならず、今や諸外国でも盛んに愛唱されている名曲である。

本日演奏する作品は、この歌曲の旋律を基にしつつも、内容的には、歌曲に含まれない短調の中間部を配するなど、全く新しいチェロ独奏曲として作曲されたもの。作曲年代は1948年だが、あろうことか、この曲の草稿は、その後半世紀以上にわたり行方不明になっていたのである。

しかし、父の没後数ヶ月のある日、私はついにその草稿と出会うことになる。判読しづらい楽譜だったため、早速私は清書し、父の追悼の意味を込めて2003年秋、東京のステージで初演した（ピアノ平井元喜）。多くの人々が涙を流して喜んでくれたのも記憶に新しい。

●平井丈一朗：幻想曲「和」(Wa)

チェロとピアノのための書き下ろしの自作“幻想曲「和」(Wa)”については、先に発表し、欧米でのリクエスト演奏も多い“無伴奏チェロ幻想曲「北斎」”と対を成す作品という位置付けになるが、「和」とは「日本のな」という意味に加え、平和の「和」を念頭に置いた作品なのである（2013年作曲）。

日本人としてのアイデンティティーを世界に示すためにも、日本の作品（自作）の必要性をかねがね感じてきた私だが、どういうわけか、チェロのためのそうした作品を書くのは後回しになってしまった。因みに、20代の頃に作曲した「ピアノのための詩曲」は日本の味わいのあるピアノ独奏曲としてニューヨーク、ロンドン、ブダペストなどで演奏され、米国で出版された「現代ピアノ名曲辞典」に詳細な解説付きで紹介されている（日本では楽譜が未発売）。

さて、“幻想曲「和」”については、今回敢えて各部の解説無しで聴いていただけたら、と思う。作曲に際しては、日本人の感性を表現した「和」のテーマと、後半に出てくる、もう一方の「和」のテーマが中心となっており、規模の大きい曲ではないが、私自身幼少の頃に焼夷弾の雨をくぐり抜けてきた体験もあり、「戦争は絶対にあってはならない」という強い思いが込められている。

平井丈一朗

プログラム

●ヴィヴァルディ：チェロ・ソナタ第4番 変口長調

●ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第3番 イ長調 作品69

——休憩——

●平井康三郎：「さくらさくら」によるパラフレーズ

●平井丈一朗：幻想曲「和」(Wa)

曲目について

●ヴィヴァルディ：チェロ・ソナタ第4番 変口長調

イタリア・バロックの大作曲家A.ヴィヴァルディ（1678～1741）は、オペラから室内楽に至る幅広いジャンルに夥しい数の作品を残した。その中で特に傑作の多いのが協奏曲やソナタの分野ということであろう。チェロ・ソナタに関しては、ヴィヴァルディが生涯に何曲書いたのか、紛失したものもあるので定かではない。しかし、一般に知られたものとしては作品14の“6つのソナタ”があり、その4番に当たるのがこの曲である。

曲はいわゆる緩一急一緩一急の4つの楽章から成る、典型的なイタリア・パロックの形式で書かれ、明るくのびやかな曲想が魅力的である。

第1楽章 3/8拍子。付点音符と三連音を中心とする優雅な音楽で、堂々とした雰囲気を有している。

第2楽章 2/4拍子。シンコペーションの面白さを感じさせる楽しく快活な楽章。

第3楽章 4/4拍子。どこか哀愁を漂わせる短調の楽章で、後半悲しみを強く訴えかけるが如く歌い上げる。

第4楽章 3/8拍子。急速で晴れやかな楽章であり、フィナーレにふさわしい華やかさと力強さを併せ持っている。

●ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第3番 イ長調 作品69

ベートーヴェン（1770～1827）は生涯に5曲のチェロ・ソナタを残した。バッハの無伴奏チェロ組曲全6曲をチェロ音楽の「旧約聖書」と呼ぶのに対し、ベートーヴェンのチェロ・ソナタ全5曲は「新約聖書」に例えられるが、まことに言い得て妙である。

本日の第3番は、楽聖の全作品の中でも最高傑作の一つであり、1808年に作曲された。この年は有名な交響曲「運命」や「田園」が完成をみた頃であり、曲想も雄大で、自信と輝きに満ちあふれている。

形式から見れば3つの楽章から成っているが、第3楽章にゆるやかな導入部を置いていることから、実質的には4楽章に近い内容となっている。

第1楽章はイ長調2/2拍子。悠然たる第1主題はチェロのみで奏され、ピアノのメッセージを経て充実した主部に入る。第2主題はチェロとピアノの流麗な対話が聴きどころ。

第2楽章はイ短調3/4拍子。急速なテンポで奏されるスケルツォであり、シンコペーションを多用した極めて独創的な音楽。

第3楽章はホ長調2/4拍子のゆっくりとした序奏で始まるが、この部分は短いながらも、そこにベートーヴェンの人間的な優しさが感じられる。続く主部はイ長調2/2拍子のソナタ形式で書かれ、明るく軽快、かつ自由闊達な二重奏が繰り広げられる。